

## 『能・リア王』再々演 (2009 年 4 月 29 日) : 感想

(当日のアンケートおよびその後のメール・郵送などによるもの。なお、部分的掲載もあることをお断りいたします。——国際融合文化学会)

### Spectators' Comments on *Noh: King Lear* (29, April, 2009)

・先生のお話と台本のコピーと、そして能そのものの素晴らしさで、心躍り、心安らぎ、本当に楽しい時を過ごさせていただきました。・「能・リア王」の幕が開いたときの静かな美しさ。ゆるやかに流れるように薫がからまった白い木々と花々。そしてさらに、舞台の両奥には枯れた風景もあり、幽玄の世界に一気に引き込まれました。昨日、能に浸りながら帰っておりましたら、ふと昔、トロント大学大学院の American Drama のクラスで *Noh* にかかわる essay を書いたのを思い出しました。様々な劇作家を勉強していたのですが、時折、Zen や Buddhism を語るクラスメートの discussion を聞きながら、そんなに簡単には語れないといつも思っておりました。それなのに、私自身やはり興味があつたのでしょうか。不思議な気がいたします。・先日、聖心女子大学の講師室で『能・リア王』の話をしておりましたら、皆さんとても興味をお持ちで、この次は是非誘って欲しいと言われました。もっと早く話していれば良かったと思います。また次回の公演を楽しみにいたしております。(芦田ルリ)

・『能・リア王』の再々演、すばらしい快挙です。長年のご苦労と御創造の喜びが一つになって、先生でなければ出来なかった、日本いや世界初の異文化融合です。シェイクスピアと能の世界に、異文化でなく共通文化、ユニヴァーサルな主題を見出された先生の作能です。・三演のご成功の様子が聴衆観衆の声から伝わってきます。おめでとうございます。また川地先生やガリモア先生のようなシェイクスピアの専門家にご覧いただけたのはよかったと喜んでおります。感銘を与えたと確信しております。学会活動と公演の両車輪をまわすシェイクスピアは、大兄でなくては出来ないと思います。お元気で活躍のほどを祈念しています。(荒井良雄)

・『能・リヤ王』再々演は、紀尾井ホールの前前列で、大変楽しく鑑賞しました。舞台の様子が手に取るように分かりました。何回見ても、衣装の素晴らしさには感嘆いたします。Shakespeare の作品を『能』の世界に翻案した上田先生の輝かしい業績を感じました。—『能』の世界に存在する「死後の世界」におけるリヤ王とコーディーリアの舞いは、素晴らしいと思いました。その舞には、「死のデザイン」というクリスチャン作家小川国夫の言葉を思い出します。(石井洋子)

・初体験の能、どんな感じがドキドキしていましたが、先生の始めのお話を聞いてすっかり気持ちもちが和らぎました。わかりやすく、面白くて、もう 30 分ぐらい(いや、もっと?)お話を

聞いていたかったです。初体験の能は、激しく、でも静かで、怖く、でも優しい、不思議な感じでした。どちらかではなく、両方……。あの世とこの世。能楽堂で見てみたい！と思いました。・今でも耳に残っています。独特の節まわしで言う「コーディーリア」という言葉。聞き慣れない言葉は呪文のように聞こえ、現実ではない、どこか違う世界へ連れて行かれるような、引き込まれる感覚がありました。リア王が荒々しく怒り狂って舞った場面では、カッと客席側を睨んだとき自分一人が見られているわけではないのに、ドキッとするような怖さを感じました。一転、コーディーリアの亡がらを胸に抱き、悲しみにくれるリア王からは怒り狂っていたときの怖さは微塵も感じられず、顔の表情はそのままに涙を流すわけでもないのに……。こんなにも悲しさが表現できるものかと感動いたしました。最後の場面、コーディーリアがああ世からリア王を迎えに来て二人で舞う姿は、お互いがお互いを許し、認め、愛に溢れているなあと思いました。私はやはり、この最後の場面が一番好きです。(内山芳美)

・公演前に台本をインターネットで読み、ホームページの紹介や女流能の歴史等も読み、戯曲『リア王』にも目を通しました。当日も初めにユーモアあふれる分かりやすい解説で、とても和みました。私はアメリカにしばらく居りましたので、先生のジョークにもちゃんと付いていました。素晴らしい解説がありましたので、狂言は頭を悩まさず観賞することが出来ました。本題のリア王ですが、内容は頭に入っていましたし、「3K」という主題についてもよく考えていました。しかし問題はその土台があって次は何を観るかでした。能に詳しくない私は単純にリアの能面とかコーディーリアの装束とか、舞台のセットの木(松?)の白さとか、幼稚な事しか考えられず、その空間を流れる波のようなものを"感じる"という事しか出来ませんでした。作品や役者に対する評価なんて論外で、母に感想を聞かれた時には困ってしまいました。芸術鑑賞の知識や力はまだ私には無いようです。今思うと、もっと丁寧に一つ一つその場で登場人物の思いと共に発せられた「言葉」に耳を傾ければ良かったと考えます。作品を観ている間は心地よく、気持ちがとても落ち着きました。先生を喜ばせられるような感想が言えず、申し訳ありません。またどこかでシェイクスピア能の再演、また新作の発表等ありましたら、是非とも伺います。今回、能という芸術と触れ合えたことに感謝しております。・ロビーに出ているビョークのCD、私は繰り返し聴いています。先生が謡曲を作られた。好きになったきっかけは映画「ダンサー・イン・ザ・ダーク」です。すごい人だなあと素直に思います。表現も強くて、でもやわらかくて、自然の生き物の様な。自然そのもの、そんな感じを受けます。(梅内はるか)

・私には三回目の鑑賞なのだから、さすがに感動できるかどうか心許無かったし、能舞台ではなくステージでの演能ということで、果たしてどうなのかと期待も半ばであった。ところがどうであろう、シテのコーディーリアが左側から現れたその瞬間に、私の心は緊張と感動に満たされた。本来橋掛りになっている位置に、菓草の舞台装置が実に巧みにしつらえてあって、それを見ながら、あの、甘やかでとろけるようなコーディーリアの声が発せられたのである。また終わりの方で、リアが、「コーディーリア。お前の声はいつも静かに。柔らかに優しくあった。

それは女の美德。ああもうこの世にはいない」と謡うが、「コーディーリア」の箇所ではひととき  
わ高い音程で謡った。その途端、私は感動のあまり、こらえきれなくなって<sup>おえつ</sup>嗚咽に襲われた。  
しかしその後の、<sup>みたま</sup>御霊になった二人の早舞と相舞に至って、私の心はすっかり晴れ晴れし、喜  
しくなると、誠に後味の良いものとなった。もう一度、いや、今後、年に一度の恒例にして、  
足立禮子先生と遠藤喜久先生のお命の続かれる限り演じてもらえたなら、と本気で思っている。

**(遠藤光)**

・能、狂言、共に初めて鑑賞しました。台本があったのでわかりやすく鑑賞することができま  
した。狂言はとても面白く、能は静と動を感じ、笛、太鼓、鼓、の音がとても心地よく聴こえ  
ました。能楽師の声には驚きました。面に圧倒され、衣装に魅了されました。今回がきっかけ  
となり、これからも、もっと伝統文化に触れていきたいと思います。すばらしい公演をありが  
とうございました。(大嶋宏美)

・素晴らしい内容でした。仕舞も力を入れておられ感動しました。東西文明の融合を説かれた  
思想家の言葉をそのまま実現されておられる感じで、上田先生の作品に大変感動いたしました。  
シテの足立先生、ツレの遠藤先生の演技には熱がはいっていて感銘いたしました。(柿木健二)

・先日紀尾井ホールでの「能・リア王」は久しぶりに幽玄の世界にいざなわれた感があり、こ  
の上ない至福の時を過ごしました。とりわけ最後のリア王とコーディーリアの霊の舞にはシェ  
イクスピアと能の世界の見事な融合を見る思いでした。(門井昭夫)

・先生のお話が国際的で、眠っていた頭の中が、大変刺激になりました。ご縁ですので、ISHCC  
(国際融合文化学会)に入会させていただきます。お役に立てるかわかりませんが、勉強させてい  
たきます。(加藤孝子・藤間勘七孝ふじまかんしちこう)

・ハズリットが言うように、シェイクスピアの『リア王』は、作者がその生涯に最も真剣に取り  
組んだベスト・プレイである。これが能への改作に適さないはずはない。能は洗練された悲  
劇的美意識を舞台上に生み出すのに最適だ。紀尾井小ホールで行われた上田邦義氏の翻案では、  
この洗練された感覚が得られた。わたしは同劇が 2008 年 5 月渋谷のセルリアン能楽堂で行わ  
れた際にも観能したが、今まで観た他のシェイクスピア劇の改作と比較して、上田氏の作品は  
能とシェイクスピア劇のそれぞれの伝統に忠実である。上田氏の作品が現代の舞台より能舞台  
により向いている理由は、「橋掛り」にある。それはこの世とあの世の橋渡しであり、リア王が  
「悟りへの道」に入るのを表現するのに「橋掛り」が力強く感じられるからだ。それにしても、  
主役の二人リア王とコーディーリアの掛け合いの中で、シェイクスピアの原文がもっている詩  
の生命が躍動するのを観て、ファンタスティック(素晴らしい)と思った。だがこの『能・リア  
王』のポイントは、作者が付け加えた「アイ狂言」の歌に示されていることは確かだ。―「思  
えばこの世は三つの世界。心と言葉と行動と。三つとも大事のこの世かな。三つとも大事なこ  
の世の世界。三つの世界が一つにならねば。リア王殿は救われぬ」。この作品は、真の(深い意  
味の)異文化交流に成功している。それは作者のホリスティック(全人的)な人間観によるも  
のと思う。(ダニエル・ガリモア)

・人間くさい部分をすべてカットして、愛と救済というテーマに焦点を絞った。かつてジョン・F・ダンビーは、「コーディーリアを理解することは、劇全体を理解することだ」と述べたが、この寡黙な娘が劇中に占める位置は、それほど大きいのである。この神性を備えた象徴的存在であるコーディーリアをシテに据えることで、シェイクスピアと能を合体させることに成功している。観客は、能の持つ高い精神性と、幽玄という美意識を感じしながら、シェイクスピアの世界に溶け込むことができたからである。「シェイクスピアの言葉の芸術を、静謐で幽玄な能の世界に如何に生かすか」。この度、このような形で上田氏が自らのライフワークを結実されたのは喜ばしいことであり、また東西文化の交流という面からも意義深いことだと思う。(川地美子)

・今回は、能舞台でなく、さらに舞台も幅広(横長)になったせいか、能舞台独特の緊張感に包まれた雰囲気とは異なる、少し柔らかな雰囲気を感じました。個人的には能舞台の緊張感が好きですが、今回の舞台も趣があって良かったと思いました。会場を後にされるお客様の笑顔から、公演の素晴らしさをあらためて感じました。(菊地善太)

・今回も最後の場面、魂になった二人の喜びの相舞、そして真実(まこと)の国に行く父をじつと見守り、娘も嬉しさを抑えながらそのあとを追って行く姿に、親子の情愛を感じ、感動と幸福感で満たされました。一緒に鑑賞させていただいた友人たち皆さん素晴らしい機会をいただいたと喜んでおりました。(小出芙美子)

・上田先生、いきいきと輝いておられました。先生のされてきたことの凄さが改めて認識できました。先生がアイスランドの歌手ビョークの映画に謡曲を制作された(依頼された)理由が、今回はじめてよくわかりました。彼女は欧米では、「平和のメッセンジャー」といわれているとか。アテネ・オリンピックの開会式で歌ったときは、まるで妖精のようでした。先生、これからも活動、継続して頑張ってください。応援しています。先生のシェイクスピアと能は、ぴったりとマッチしており、全く違和感がなくむしろ、現代人に親しみやすい能になっているように思えます。(齋藤千絵)

・最初の先生の解説とても面白く聞かせていただきました。残念ながら午前国際融合文化学会は拝聴できませんでしたが、ぜひ聞いておくべきでした。狂言ではとても笑わせて頂きました。酒樽を紐で引っ張ったり足で押したり・・・ユーモラスな演技でわかりやすいところに、古来の台詞回しのあたりに、普段あまり古典芸能に接点がないので、とても新鮮な思いでした。同じ演目で笑う昔の人々の楽しみや風俗などに思いを馳せてみるのも古典芸能の楽しみ方かなあと勝手に思っております。仕舞は『土蜘蛛』でしたが、先生が「ヤマタノオロチ」等の神話や古代の話が元になっていると解説されておりましたが、古代史や神話が好きな私としてはとても興味深く拝見させていただきました。神武天皇や景行天皇が戦った土蜘蛛のくだりなんでしょう・・・投げられた白い紙のクモの糸や静かな所作が印象的でした。最後の『リア王』には感動しました。リア王とコーディーリアの儼かな舞に思わず涙ぐんでしまいました。後悔するリア王がとてもとても悲しく、コーディーリアの努力も虚しく命が尽きることもまた切な

く。母を見ると涙を流しておりました。きっと一昨年亡くなった父を思い出したのかもしれませんが。シェイクスピアの独特の硬い台詞も、日本の古典芸能にこんなにもマッチするものなのかと、前回拝見した『能・ハムレット』（カザルスホール）よりも今回は強く感じました。今回は母共々とても良い経験と感動をいただきました。先生の作品がまた公演されることを期待いたします。（田畑幸代）

・素晴らしい能を鑑賞させていただき誠にありがとうございました。先生の解説をいただいたお蔭で素人の私でも内容を楽しむことができました。鮮やかな舞、心に響く鼓の音色、感動的なクライマックス、まるで夢の中にいるようでした。シェイクスピアと夏目漱石の関係について初めて学ばせていただきました。100 年近くも前に、シェイクスピアの作品を演出するとしたら能が一番良いとの漱石の先見性、そしてそれを実現された上田先生の情熱とご努力に感服しました。本当に素晴らしい機会を賜り、心より御礼申し上げます。（浪川弘行）

・近年シェイクスピアの異文化パフォーマンスの研究をしている間に、能、狂言、歌舞伎などの世界へ誘われ、特に能が体現している世界観や美意識に強い共感を覚えております。これまでは、りゅーとびあやクナウカなど、程度の差はありますが、能（舞台）の影響を受けた作品を見てきましたが、今回は本物の『能・リア王』を見ることができて、非常に満足しております。紀尾井ホールで購入した御高著未読ですので、もう少し勉強してから、自分の感想を述べたいと思います。（浜名恵美）

・リヤ王の悪むすめたちを資本主義に例えられたのには、思わずにやとしてしまいました。山本七平さんの日本式資本主義（？）だったかを引っ張り出して読んでいるところです。マルクスも笑っていることでしょう。やはり、最後は、人の倫理に立ち戻るのですね。「人生の本舞台は常に将来にあり」とは、尾崎行雄の 77 歳にして肺炎をわずらったとき詠んだ句です。今まで身につけた経験知識はあくまでも明日の飛躍の肥やし、だと私は受けとっています。ちょうど、橋掛りから 2 列目の舞台向かって左の壁際におりましたので、夫は足をずっと伸ばしていることができ、快適なようでした。はじめての能でしたので、休憩中にお隣の方にいろいろ教えていただきながらエンジョイしました。道化師にリヤ王のあらすじを語らしてしまう、など、面白い仕立てだと思いました。With great admiration, once again thank you, thank you です。・後に友人に送った感想文をお送りします。「先日、上田邦義氏にお誘いを受け「能・リア王」を見に行きました。なんと、上田氏の解説がこれまたすごいのです。三人の王女のうち強欲の深い姉二人を資本主義的、と評されたのには、つい、にやり、としてしまいました。コーディーリアを社会主義とは言われませんでした。上田邦義氏作、狂言問語の、『この世は二つ / 見える世界と見えない世界』『この世は二つ / 言葉の世界と心の世界』『この世は二つ / 心の人と言葉の人よ』『思えばこの世は三つの世界 / 心と言葉と行動と / 三つとも大事のこの世かな』『三つとも大事なこの世界 / 三つの世界が一つにならねば / リア王殿は救われぬ』。一これには心を打たれました。（原不二子）

・遅くなりましたが、感想を送らせていただきます。まばたきを忘れる程、舞台に見入ってお

りました。静の中にも、激しい人間の情を感じることができ、本当に感動いたしました。開演前、客席で緊張して鑑賞を構えていた私ですが、上田先生の解説をお聞きして、リラックスすることができました。ありがとうございました。(東原玉美)

・30 分間のお話は、とても勉強になりました。(松添寛之)

・能は初めて観ました。日本の文化の深さに心を打たれました。特にいろんな所作には、驚きの一言につきます。『能・リア王』は素晴しかったです。実のところ、眠たくなるのではと心配していましたが、最後まで時間がアッという間でした。(水口万知子)

・先日お能拝見いたしました後で、A 先生や G 氏など 4 人ほどで『能リア王』について色々話しました。『リア王』の解釈と舞台作品の構成の素晴らしさ、そして足立先生の見事な所作に話が集中いたしました。能舞台の持つ特別な力は、今回の舞台では感じられませんでした、足立先生の演技自体がより鮮明に浮かび上がってきたような気がいたしました。・能の美学・美意識・様式によって創作された「能シェイクスピア」は、従来の英文学的な知見では得られない新しい作品の解釈を提示するものであり、ここに非英語圏で創作されるシェイクスピアの素晴らしさと意義があると思います。この作品でカギになるのは、上演の際の身体表現であり演技空間の多層的な意味でしょうか。音や動きをどこまで論じられるか、「能シェイクスピア」についてしっかり勉強しようと思うようになりました。名古屋城の敷地には能楽堂がございますので、『能リア王』の再々々演、今度は名古屋でもできるとよいのですが、『能リア王』や『能ハムレット』を観終えて、外に出るとお城が見えるというのは、特別な経験になるような気がいたします。・『能リア王』におけるコーディーリアの扱いを考えますと、この作品は国際的な評価を受けるに値する超一流の『リア王』であると確信します。上田先生と足立先生の作り上げたこの作品は、「シェイクスピア能」の中でもとくに後世に残すべき作品ではないでしょうか。足立先生の作品に対する思いもあるのですが、再演、再々々演の中で、ますます作品として洗練されてきている気がいたします。新作能の公演がどれほどの労力を必要とするか。その舞台創作に対する先生のエネルギーには本当に頭が下がる思いです。その御苦勞を思いつつもう一度、『能ハムレット』と『能リア王』を観たいという気持ちがございます。『能ハムレット』再演か『能リア王』再々々演を拝見できればと願っております。(南 隆太)

・リンカンやオバーマ新大統領や尾崎行雄に言及された先生の講演、今回も新鮮でした。ホールでの初演能、舞台一面に飾られた美しくも幻想的な舞台装飾のアレンジメント、三本の柱で荒野に建つフランス王妃の仮住まいを表すなど、効果的でした。女性能楽師のさがけのお一人、足立先生は今年 84 歳。八歳から稽古をはじめ、今年で 76 年目の大ヴェテラン。コーディーリア姫を演じて、その甘くとろけるようなお声はますます磨きがかかり、涙する人も多く。足立コーディーリアの精神性の高い女性の魅力と遠藤リア王の迫力と悲哀。期待を大きく上回る演能でした。(宮西ナオ子)

・初めての鑑能でしたが、とても楽しく見させていただきました。途中むずかしい言葉もありましたが、演者たちの動きで理解できとても面白かったです。また機会があったらぜひ見に行

きたいと思います。(望月千絵)

・舞台の演技(シテの足立禮子とツレの遠藤喜久のコーデリアとリアはいかにも親子らしい組みあわせで、美技と写った)のみならず、何よりもシェイクスピアの原作のどこに作者がこの能作品のプロットの中核を定めているかに、興味が引かれた。最近、旧約聖書の「ヨブ記」と『リア王』の比較を考えたことのある私はとくにそうであった。シェイクスピアがこの「ヨブ記」に大きな影響を受けていたことは、明らかである。上田作では、本作品の焦点をシェイクスピアの『リア王』の最後の場に置いたのは、何よりも正しい、と私は見た。シェイクスピアは敬虔なキリスト教徒であったのだろうか。人間としてはそうではなかったとは言えないだろう。シェイクスピアの作品が、豊かに聖書からその生命を汲んでいることが正しいにしても、シェイクスピアの作品は全体としていかなる意味においてもキリスト教弁護論にはけっしてなっていないのである。このことは、上田作品の終わり方を見たときに観客がとくに注意しなければならないことであると、私は判断した。(山形和美)

・ Very enjoyable (in spite of my poor understanding of Japanese). Thank you for the play and Ueda san's good philosophy. Nicely staged Kyogen, but we had to wait a long time for Lear! There will always be an appreciative audience (even an uncomprehending one) in Britain. But if the performance is billed as a Noh version or interpretation of 'King Lear', they must be forgiven for wondering when it will start, and what happened to the familiar story (plot). (Martin Blakeway) (British)

・ This was the third time for me to see UEDA's *Noh: King Lear*; therefore I had no more expected to be moved. However, the moment Madame ADACHI as Cordelia appeared on the stage from the left, I tensed up completely, and was so moved that I could not bear sobbing or crying silently. Madame ADACHI produced her words so beautifully and so melodiously, calling to the herbs still unknown to humans: "All blessed secrets, / All you unpublished virtues of the earth, / Spring with my tears!" What a touching, what a moving scene in the very beginning of the play! The later scenes were so pitiful, and so sad, but...Then I felt completely relieved when the ghost of Cordelia appeared, saying "Look up, my lord. Come this way", and danced together with the ghost of Lear. I wish the play be repeated every year as long as both Madame ADACHI, the eldest female Noh performer of Japan, and Master ENDO be up and doing. (ENDO Hikaru)

・ I saw Ueda Kuniyoshi's *Lear* adaptation at the Cerulean Tower Noh theatre in Shibuya last May, and have to admit I prefer the intimacy of the traditional setting to the proscenium arch of the Kioi Hall in Yotsuya, where the adaptation was staged this April. In particular, the Noh *hashigakari* is effective at expressing a central metaphor of the play of life as a journey or transition. As Edgar puts it, "Men must endure / Their going hence, even as their coming hither. / Ripeness is all." In other respects, however, the adaptation was

unchanged from last year, and still achieved the refined aesthetic effect at which this style of cultural fusion excels. The Fool's song clearly expresses the point of this production: "There are three worlds: / The world of words, the world of behaviours, / And the world of mind and heart; / The three are all important, / But, until they accord with one another, / Lear will not be saved." I suppose it is this holistic interpretation that made this adaptation a truly transcultural one. **(Daniel Gallimore)**

・ Ueda's *Noh: King Lear* is absolutely unique. He let a Kyogen actor tell the story of Lear's life. His play begins with the scene of a touching reunion between Cordelia and Lear. According to John F. Danby, to understand Cordelia is to understand the whole play. Ueda succeeded in developing Shakespearean theme of love and redemption in his Noh play. When Cordelia's ghost invited Lear to the next world, the spectators understood Zeami's concept of 'yugen,' quiet, mysterious and profound beauty. In addition, they purified themselves through the last scene showing the promise of celestial bliss. Ueda appears to have given an affirmative answer to his own question, "Can I perform Shakespeare's drama in the style of Noh?" This play is not Shakespeare's work but Ueda's "creation." I believe his experimental attempt is a valuable contribution to the cultural exchange between Japan and England. **(KAWACHI Yoshiko)**

・ Ueda has chosen his main motif from around the end of Shakespeare's work, which seems to me more than right way in making up the Noh play out of Shakespeare's work. This way of saying naturally leads my eye to the *Book of Job* which provides the consummation of Shakespeare's *King Lear*. That is to say, starting from the *Book of Job*, going through Shakespeare's *King Lear*, we arrive at Ueda's work. When looking into minutely this three-fold structure, we can judge Ueda's superb dramatic ability, and *this work of Ueda's Noh play exposes its dramatic power, which is so moving.* **(YAMAGATA Kazumi)**

・ 開演前のお話は私にはよい案内でした。舞台の展開と謡いや音楽に別空間の時を過ごすことができました。なかなか自分からは近づかない分野で、本当に良い機会を与えていただき有難うございました。演者の方の能一筋に歩まれている姿勢も美しいものですね。 **(T.A.)**

・ 再々演のチラシを拝見した時から楽しみにして参りました。念願かない最高でした。足立先生のコーディーリアはとても気品高く美しかったです。神秘的な世界へ引き込まれそうな気分でした。一時間もものに短縮しての台本作り、大変ご苦労さまでした。会場が明るく華やいだ雰囲気よかったです。狂言には元気をもらいました。 **(S.I.)**

・ 素晴らしい日本の伝統芸能「能」を鑑賞させて頂くことが出来、本当にありがとうございます。なかなか鑑賞の機会がありませんので、嬉しゅうございました。時間が止まり、舞台と一つになり、至福のひとときでした。何時の世も如何ともし難いのは「人の心」なのでしょう。リア王の苦悩に満ちた能面が心に焼きついています。最後の場面、真実(マコト)の国へと



歩み行く二人の姿が胸を打つと同時に観る者の心に安堵を与え、一層素晴らしい「能」になったと思いました。御高齢の足立様の優しい、そして人々の心にひびくお声も素晴らしいものでした。上田先生のシェイクスピアの「オセロ」を是非鑑賞させていただきたいものと希っております。講話も楽しく、開幕前のウォーミングアップに充分でした。(K.K.)

・今までお能というものには全然縁がなく、昔、薪能なるものを二度程観ただけで、それに何の予備知識もなく、ただ漫然と観終ってしまったのですが、今回は、前以って資料をおくっていただき、また公演の前の上田先生のお話が殊の外楽しくわかり易く、初心者にとってお能の舞台にたやすく向き合える状態にしていただけましたので、難解と思われた新作「リア王」を充分楽しむことができました。それにしても足立禮子師の年齢を感じさせない謡いと舞の力強さにも圧倒されました。私は日本舞踊の際の振袖一枚でも重く感じますのに、あのお衣装の上に面、かつら、ライト、と・・・驚きと感動の連続でした。帰ってから友人知人に、こんなに素晴らしいものを観てきた、と吹聴したら、シェイクスピア好きの友人に、どうして誘ってくれなかったのかと、詰め寄られました！また再演の際には是非彼女も一緒にお伺いしたいと思っております。一日も早い再演の日をお待ちしております。(K.M.)

・能は男性劇、女性の足立先生が演じる『能・リア王』は、女性の地位向上の大きな一歩で、感動しました。能の起源はインドとか、インドネシアのバリ島でインドラーヤマーヤのレゴンクラトン王宮で日本の薪能を観るように自然に、今度のリア王もとても良かった。(N.M.)

・価値ある時間を与えて頂き心から感謝いたします。大兄の平和主義にはいつも感服いたしております。(S.M.)

・はじめての能鑑賞でしたが、とてもわかりやすく、楽しめました。『能・リア王』は story も知っているのでよくわかりました。(Y.N.)

・全体とても素晴らしかった。楽しくお話ししていただき、能の良い楽しみ方も又いろいろの角度から見ること勉強になりました。はじめての能を拝見し感動しました。お誘いくださった S.I.さまに感謝しております。(M.S.)

・公演全体いい構成だった。冒頭の解説は効果的だった。『能・リア王』は悲劇性が強調され、能の魅力を十分に出していた。途中の“道化”のあら筋の独白は少々くど過ぎ(長過ぎ)と思う。(E.T.)

・「リア王」を能の舞台でどのように表現されるのか、とても興味がありました。すっかり魅了させられました。「リア王の苦悩」「コーデイーリアの優しさ」短い時間・少ない動きの中で、十分に心に伝わる物がありました。事前に台本、資料等頂いてありましたので、少々の下地は出来ておりましたが、実際の舞台は活字から入るものと違い、素晴らしかったです。小説が映画化されたり、テレビドラマ化されたりすることが多々ありますが、何か物足りなさを感じます。日本古来の伝統芸能、「能」の世界となるとやはり違うと思いました。素晴らしい時間を有難うございました。(H.U.)

・二度目といえば二度目ですが、初めて観賞するような思いでいました。やはり作者の解説が

あることは、私個人にとっては大切なことでした。解説が専門的な解説で終始するのではなく、この先に現われることへの全体的な心遣いは何よりでした。シェクスピアと夏目漱石、坪内逍遙、また歌舞伎と能のとらえ方にふれられ、国際的な融合文化という課題を身近なところで語っていただいたのも、格好の誘導ではなかったかと思います。全体を自分なりに整理すると、戦後、日本の優れた芸術文化を世界に紹介しようと尽力された岡田茂吉の論文「日本は文化の組立て工場」を想起いたしました。狂言、仕舞そして能を通じて、あるべき文化を築き上げていかれるという。そして今朝の私共の研究所の朝拝のお歌の一つは、「行ひも心も言葉も美はしき人こそ天国天人なりける」でしたが、これに加えて、「真が生む心は善なり善が生む形は美なり知れよまめひと」のお歌に導かれました。これらが演者の振る舞い、発する言葉、能面や衣装、はやし、台本、舞台等に凝縮されてくるのでしょうか。昨日の「昭和の日」は私にとって記念すべき日でした。(Y.U.)

・今回はゆっくりと拝見でき、楽しませていただきました。演出のご苦労は大変なものだと思います。今後のご活躍を期待いたしております。(E.Y.)

・初めの解説、あってよかった。能リア王は、すべてがきれいでした。能に興味がありました。また観に行きたいです。(以下無名各氏)

・冒頭の解説と狂言、仕舞、そして能リア王が三位一体の構成となり、受け入れることが出来た。東西文化の融合のテーマ。心言行という人間の真実の姿を表現されていて、解説にあったように、美しいものをとりあげ、他を捨象された内容が、ストレートに伝わってきた。

・地謡、今回もすばらしかった。最初の解説で、台本を見ながら鑑賞するようにとのことで、お囃子が入っても、うたいの言葉が全部わかって、それが今回とてもよかった。

・はじめに説明(解説)があったので、狂言のセリフがとても聞きやすかった。舞台の狭さがかえって言葉が聞き取りやすく楽しく聞けた。『能・リア王』舞台を拝見できて光栄です。

・解説もあってよかった。バラエティに富んでいて楽しかった。原作をうまく取り上げて、わかり易く作られていると思いました。衣装の工夫も面白かった。

・ステージ舞台にしつらえられた荒野の草花に呼びかけた、コーディーリアの最初のセリフ「いまだ大地に潜み、人間に知られぬ薬草たちよ。私の涙を受けて芽を出だし・・・」に、しびれるほど感動した。なんて素晴らしい神秘的な女性なんだろうと、冒頭から魅了された。

・新鮮のタッチで、とても感動致しました。新しいジャンルへの挑戦と、古典の融合だと感じました。この世の不条理を、真と愛で、魂の世界へまで問いかけ、人生とは、天命とは、と語りかけてくれた。魂から喜びを感じました。能は44年間で4・5回目。

・観終わって「シェイクスピアが創造した最も美しい女性」の意味がわかった。